

篠田錦策・佐々木高政共著「和文英訳十二講」洛陽社 1954 年 3 月 7 日刊を読む

和文英訳における目標

1. (1) 以上述べ来たったことを要約すれば、「原文の語句の表面に捉われず^{とら}に、意味の核心をつかんでそれを表すには、熟知している易しい英語を用いて、最も簡単な文章型式に組み立てて行くこと」であり、

(2) また、「長い込み入った文章は短くやさしい数個の文に分解し、書きにくい部分は、あるいは視点を移動し、あるいは叙述の順序を変更し、多少説明的になってもいいからその意味だけを写す」

(3) しかし、「どうしてもある部分を書けないと悟ったら、コジツけて変テコなぶちこわしをやるよりもアッサリあきらめて、兎も角書き上げた部分だけを生かす」

(4) これは受験答案を作るのにだけ必要な心得でなく、いやしくも和文英訳の修業を志す人々は、こうして出来上がった訳文を保存しておいて、後になってから抜かした所を補うことは勿論、その他の場所に手を加える、すなわち推敲^{こう}することを常に心掛けるとよい。
2. (1) ここで諸君の中には「一体、理想的な翻訳とはどんなのをいうのか」と質問される人があるかも知れない。

(2) もっともな質問である。

(3) 「日本文の語句の exact English equivalent を見付け出し、それを原文の意味の重点が移動せぬよう配置し、しかも原文の情緒や雰囲気、全体の調子で再現し得るよう努力する、すなわち原文と等質な訳文を作る」

(4) これが理想的な訳文であろう。

(5) しかしこれは英国人と同等またはそれ以上に英語のよく出来る日本人か、日本人と同様またはそれ以上に日本語がよく出来る英国人にして始めて出来る芸当であって、誰にも出来るという訳ではない。

(6) また仮にそのような人がいるとしても、日本語にまつわりついている国民的感情とか連想が、英語という着物を着た場合、英米人に果たして正しく伝わるかどうかは甚だ疑問である。

(7) 日本語表現に酷似したものもあるが、例えば「彼は馬食した」は He ate like a horse.

(8) 「彼は僕の右の腕だ」は He is my right arm.

- (9)「彼は骨と皮ばかりだった」は He was only skin and bone. に当たる。
- (10)それは例外的な場合であって、大部分はそのままでは untranslatable である。
- (11)簡単な例を挙げると、「君は金がうなるほどあるのでしょうか」を You have so much money that it groans, doesn't it?と訳したんでは、まさか英米人に通じまいと思われるが、その通りであって、彼らは quaint and exotic と打ち興ずるだけであって、その意味は汲めないであろう。やはり英語の方に妥協して You have a mint of money, haven't you? くらいにする他はない。
- (12)「やかん頭だよ、あいつは」は He is as bald as a kettle.だと頑張っても仕方がない。彼等は kettle を blackness と連想しても「ツルツルさ」とは結び付けない、やはり英語の方に妥協して a kettle を an egg としなければならない。
- (13)「棺桶に片足つつこんでいる」という文句にしても have one foot in the coffin でなく have one foot in the grave というのである。
- (14)「あの夫婦は犬と猿との仲」を He and his wife are dog and monkey terms.などと新機軸を出して見ても駄目で lead a cat and dog life としなければならない。
- (15)こんな具合で、そのままの形で翻訳出来ない場合の方が多く、また思い切って同じ形に訳した場合、英語を母国語としない我々には、果たしてそれが英語として意味が通ずるものやら通じないものやら判定に苦しむ場合が多い。
- (16)そこで我々のとるべき態度は自らきまってくる。すなわち原文の語句にこだわらず、意味の核心をつかんで、それを英語にうつす、つまり翻案的態度をとればよい。
- (17)それには二つの条件が必要で、一つは日本語の解釈がしっかりしていること。
- (18)もう一つは原文の idea を英語で表すために、自在に reshape する頭の柔軟さである。
- (19)この二つが備わっていれば、和文英訳、実は和文英語翻案はそれほど hopelessly difficult task ではない。
- (20)よい英文が書けるかどうかは各人の読書量と読書の際の理解の深さ鋭さ、注意、記憶及び文章に対する勘などによって決定されるのであるが、沢山の英書を読んだわけでもなく、沢山の言い方を覚えている訳でもない我々普通のものは、立派な英文を書こうなどと望むだけ無理であって、幼稚でも何でもいい、何とか英語として意味の通じるものが書ければよい。
- (21)ただし、原文の意味だけは正確に捉え、それを一度なり二度なり目に触れ耳に聞いた英文の pattern にはめ込んで、翻案し説明する態度で英文に組み立てるのである。
- (22)そうした書き方を身に着けるには英文を読む際、時折 paraphrase して見るのが手っ取り早い練習法かと思う。

(23)paraphrase というと誰もおっくうがって実行しないが、その原因は一つには単に難しい語句だけ選んで問題にするからで、今一つは「言い換え方の要領」を知らないからである。

(24)「要領」というのは本書の第一講で指摘したように、同一の内容を色々異なった主語を用いて、動詞以下もそれに応じて必要な言い換えをするのである。

3. (1)本講を結ぶ前に「動作表現及び状態表現」に就いて一言したい。

(2)これは「言い換え」に助けになると思う。

(3)「気をつけなさい」を Take care. というのは「動作表現」であって、Be careful. というのは「状態表現」である。

(4)「急ぐな」の動作表現は Don't make haste. であって、状態表現は Don't be in a hurry. である。

(5)Be kind. Be quick. Be punctual. 「時間を守れ」、Don't be idle. Don't be in late. I was late. 「おくれた」。Don't be in joke. 「冗談言うな」など、英語には「状態表現」が随分多く用いられるではないか。

(6)(状態表現には(be + 形容詞)、[be + 名詞] または [be + 形容詞 + 名詞] が多い)

——— 《練習問題》 ———

A. 状態表現に書き換えよ。(答えは後に添える) A.

- | | |
|---------------------------------------|--|
| 1. It is five years since he died. | 1. He has been dead for five years. |
| 2. It has not rained for a long time. | 2. We have had no rain for a long time. |
| 3. I thank you for your kindness. | 3. I am thankful for your kindness. |
| 4. I very much wish to succeed. | 4. I am anxious to succeed. |
| 5. His conduct deserves high praise. | 5. His conduct is worthy of high praise. |

B. 状態表現に訳せよ。

B.

- | | |
|--------------------------|---|
| 1. 彼が一番先に着いた。 | 1. He was the first to arrive (arrival). |
| 2. 彼はそのことについては一言も言わなかった。 | 2. He was silent about the matter. |
| 3. 彼は船に弱い。 | 3. He is a poor sailor. |
| 4. ハエや蚊は伝染病を媒介します。 | 4. Flies and mosquitoes are carriers of infectlouse diseases. |
| 5. 彼女は嘘ばかりつくんだ。 | 5. She is a habitual liar. |

P239 ~ 241

[コメント]

篠田錦策先生と佐々木高政先生共著の名作「和文英訳十二講」は英語学習の本質に迫る。英語指導者必読の書と確信する。先生方は是非、御一読を。

— 2014 年 10 月 3 日 林 明夫記 —